

理念と文化

園長 児嶋 草次郎

今日は、9月4日の金曜日。台風24号の九州接近により大雨が降るということで、小・中・高すべて学校が休校となっています。もう今もかなりのドシャ降りで、朝8時20分の処遇職員の朝礼に行くために、事務所から20mほど歩いただけで、ズボンはかなり濡れてしまいました。線状降水帯も予想されているとか。今、全国各地で線状降水帯が発生し、川が氾濫して町に流れ込み、床上浸水などの災害をもたらしています。被害に遭われた方々にはお見舞い申し上げます。専門家は、この大雨は地球温暖化による海水温の上昇によるものだと説明しています。そう言えば、9月2日の新聞（読売新聞）では、今年の暑さは「歴代5位」と報じていました。

「気象庁の1日、今夏（6月～8月）の平均気温が過去30年の平均値より1.02度高く1898年の統計開始以来、歴代5位の暑さだったと発表した。」というのです。西日本を中心に、36地点で最高気温40度以上の「酷暑日」を記録したとも書いてありました。

地球温暖化のリスクを考えると、戦争などしておれないと思うのですが、世界のリーダーたちは何を考えているのでしょうか。

今朝の読売新聞では、「パリ協定『1.5度』達成困難」とも報じています。

「国連環境計画（UNEP）は2日、地球温暖化で今後数年以内に産業革命前からの気温上昇が1.5度を上回る見込みとする報告書を発表した。上昇を1.5度に抑えるという温暖化対策の国際的枠組み『パリ協定』の目標達成が不可能となったと指摘」。

「国連のアントニオ・グテレス事務総長は『化石燃料の段階的廃止や再生可能エネルギーへの転換を進める必要がある。今こそ行動を急ぐ時だ』と述べた。」

恐ろしいのは、今回の8月26日におきたネパールの水害です。私には地球から人間に対する逆襲のようにしか思えません。

標高5000mを越える所の氷河が岩盤とともに幅1～2kmに渡って崩落し、巨大な岩とともに氷河が谷底へと流れ下り、次々に湖や水力発電所を飲み込みながら猛烈な土石流となり、何十キロかに渡り村や町を一瞬にして消滅させていきました。人々はほとんど逃げる余裕もなく、死者は1200人を越え、行方不明者は約5500人だとか。

1000年2000年という単位で見れば、このような自然の変化は起きるかも知れませんが、地球温暖化によってこのような災害が頻発するようになると、人災としてとらえなければならないのかもしれない。地球を痛めつけず、私たちの身の回りの大自然と共生し合える循環の地域社会にしていかなければなりません。

さて、私はこの数日、「友愛社資料室」の展示品作りに集中しています。古い写真等を見直しながら、拡大コピーして額に入れたり言葉を添えたりする作業もけっこう神経を使う仕事です。やりながら感じる、発見したことを3点あげさせていただきます。

①そもそも、この「友愛社資料室」は何のため、誰のためのものなのか。私は入口の壁に次のような

言葉を掲げました

ここを訪れる人へ

「石井十次の志を引き継ごう」

『僕はこの世を去っても、皆んな一人ひとりが、石井となって働いてくれば、それで満足』

大正3年 石井十次遺言

この地に生きる人々によって、石井十次の志・文化は、石井没後も引き継がれた。

石井記念友愛社は、昭和20年に児童救済事業を再開し、その志・文化の発掘と再生に取り組んできた。児嶋琥一郎は、その生活の目標を人としての成長と自立に置いた。

そして、その志の具現化に今も挑戦している。その志は一代二代くらいで形となるものではないだろう。

ここに縁のあった大人も子供も、その10分の1でも100分の1でも、その志を、自分たちの与えられた場で形にしよう。

ここへ立つ子ども達一人ひとり、何らかの力によって、ここに導かれたと考えよう。

その宿命を受け入れ、ここの歴史・文化と魂との交流を通して、未来を切り開き、運命を変えると決意しよう。石井十次の志に学び、人として成長（自律）し、自立の力を身につけ自分なりの将来の夢（志）を描こう。

「世のため人のため」に働く志をもって、自信と勇気をもって、未来に挑戦していこう。一度や二度の失敗で、人生は決まるものではない。夢は君を裏切らない。

石井十次と君のご先祖様がきっと君を見守っている。多くの先輩たちがその道を作ってきている。さあ立ちあがろう。

2026年 石井記念友愛社

ここは単なる石井十次関連の資料館として機能しているだけではなく、今も子供たちを育て教育する場として息づいているのです。つまり、この世に生まれ落ちて、家庭において親からの養育に恵まれず、あるいは生活習慣や自律力を身につけるチャンスを逃がしてしまった子供たちに、再学習の場を与えねばならない大切な施設なのです。人間に対する信頼を失った子供に、希望と勇気と志を抱かせようとする場なのです。なまやさしいことではありません。

生活を始めるにあたって、ここで生活する意味、価値に目覚めさせ、未来に向けてはいあがり、前進する力を身につける動機が必要です。そのための第一歩となる場として、この「友愛社資料室」は必要なのです。

②友愛社は、戦後81年目を迎えています。石井十次の岡山孤児院の創立（明治20年）から言えば139年目ですが、友愛社の歴史だけを追っても、立派にその文化は育って来ています。その文化の中で人は育つのです。石井十次からの先人たちの築いた文化の中で、多くの子供たちが育ってきました。また職員たちが養育・教育を実践して来ました。その文化を次の世代の人たちにつなぐためにどうしたらよいのか。やはり、文字だけではなく、写真や生活の道具等、様々な手段が必要です。そのための空間でもあります。

未来を担う子供たちに文化を伝えるために、昔の写真を多く飾らせていただいています。写っている子供たちの多くは今ではもう50歳代60歳以上になられた方々です。個人情報の問題もありますが、御許可いただきたいと思います。自分たちの父親母親世代、あるいは祖父母出代の先輩たちがこの空

間で奮闘し、未来に向けて自立しようとしている頼もしい姿は、今の子供たちにも勇気と希望と誇りを与えることでしょう。

③私たちは、スポーツでも、何か活動しようとする時でも、子供も大人も、チームワークの大切さを主張します。しかしそれは横のつながりだけで完遂されるものなのではないでしょうか。時間軸で言えば縦のつながり、つまり世代間のつながりも大事なことでないのか。それをチームワークと言ってよいのかどうかは分かりませんが、精神文化と言った方が適当なのかもしれません。例えば、高校野球でも、10年ぶりの甲子園出場とか言ったりしますが、実際には、人としての直接的なつながりは何もないのです。しかし、出場する現代の選手たちにとっては、過去の出場選手たちと魂、あるいは心の次元ではつながっているのです。「オレたちには先輩たちの築いて来た伝統があるから強い」と自分たちを鼓舞激励するわけです。これを私は縦のチームワークと言いたいわけです。

そこにエネルギーを求めようとするならば、過去の先輩たちのがんばる姿を頭の中にイメージできなければなりません。この資料館が、そのための空間であってほしいのです。自らのアイデンティティを形づくることにもなるでしょう。石井十次の世界ではもうあまりに遠すぎる。職員たちにとっても、自らの仕事を遂行していくにおいても、励ます力となることでしょう。80年間に於いて、おそらく何百人という先輩たちが失敗をしながらも、必死に継いできたのです。理念は印刷した言葉として伝わっていくのではなく、時代時代の流れの中で、文化として伝えられていく、今そのように感じています。

次に、8月23日（日）の石井十次セミナーの時の理事長としての挨拶を掲載させていただきます。学びの多いセミナーでした。また、課題も新たに与えられました。次の世代にこのセミナー文化をどう伝えていくのか、これも喫緊の課題です。

皆様、第26回石井十次セミナーにようこそ参集くださいます、ありがとうございます。石井記念友愛社を代表しまして御挨拶申し上げます。昨年は石井記念友愛社創立80周年でした。そのために大きなイベントをやったわけではありませんが、戦後80年とも重なっていて、大きな一つの節目でありました。そこで、一つの記念碑なるものを作りたいと思ひまして、「石井記念友愛社資料室」なるものを作り始めております。石井記念友愛社の静養館の西側に岡山孤児院時代からある倉庫を改修して作りました。小さいものですが、戦後80年を振りかえることのできる空間としたいと思ひました。本当は本日までに中味の展示を完成させたかったのですが、間に合わず、11月23日の収穫感謝祭まで延期したいと思ひます。

歴史を振り返る時、まず年表が一番大事であります。私たちの福祉事業というのは、その時代時代の生存を支え合う和・輪・環と言ってもよいと思ひます。ですから、その時代の渦や流れにモロに影響を受けます。影響のたまものと言ってもよいでしょう。石井記念友愛社の歴史は太平洋戦争のもたらした孤児を救済することから始まりました。高度経済成長期を初め様々な渦や流れの中で私たちは生きて来ましたし、それらの中で支えを必要とする子供たちや人々とともに助け合って来ました。大まかに言えば、そういう共生・生活の流れが石井記念友愛社の歴史であります。

先ほどの年表の話にもどしますが、年表は一応完成しました。今日御出席くださっていますが、元福岡県立大学教授の田代英美先生、現在福岡県立大学で研究をされている佐藤繁美先生、それに、今日講義をしてくださいます石井十次研究者の菊池義昭先生が作成してくださいました。

これは、私たちにとっては画期的なことです。貴重な財産となります。歴史を評価する場合、その時代の渦や流れを確認しながらそれに対応する福祉事業として位置づけていかねばなりません。私た

ちは現場にどっぷりつかって仕事をしていますので、第三者的立場で検証してくださる方が必要です。その役を田代先生と佐藤先生が社会学的な立場でしてくださいました。立派な年表ができたと自負しております。この場を借りて、三人の先生には感謝申し上げます。

まだ資料室は完成してないのでありますが、新しいスタートにあたって、この歴史から何を学び、これから5年後10年後に向けて何を目標として私たちは仕事をしていったらよいのか。今日は、石井記念友愛社の職員も大勢参加しておりますので、3点あげさせていただきます。また支援者の皆様からも御助言をいただけるとありがたいです。

①まず、時代が変わろうとも変ってはいけないもの。それは、石井十次の理念を守っていかねばならないということ。私たちは、石井十次の名前を掲げて福祉の仕事をさせていただいており、石井十次の理念に反するようなことはこれからもできません。

今日、菊池先生が、「大原孫三郎と石井十次院長の出会いから日露戦争直後までの交流を中心に」という題でお話をさせていただきますが、その話の中から石井十次の理念とは、何なのかをさぐっていただきたいと思います。そして、その理念になぜ大原孫三郎が魅了されたのか、さらに、二人の友情が福祉を越えて何を生み出していったのかも確認して行ってほしいと思います。その一つがクラレ会長、石井記念愛染園理事長伊藤正明様方の取り組みだと思います。本日お話させていただきます。

②教育と福祉とは切り離すことはできないものであることを再確認すること。石井十次にとって教育と福祉は常に一体でありました。子供たちにとって一番重要な目標は社会的な自立です。自立にとって教育は体の血液みたいなものです。彼は施設の中に学校も作りました。

現在、縦割り行政の中で福祉と教育とが分離されてしまっています。不登校児がすごい勢いで増えていっています。一部の不登校を権利とする価値観に圧倒されてしまって、福祉が手を出せなくなっていると言ってもよいかもしれません。多くの子供たち、親御さんが苦しんでおられるのです。何とかしなければ、大げさに言えば国が滅びるかもしれません。

それから教育と福祉が一体であるとする価値観の中で、感性の教育がその重要な基盤だということ。つまり、子供たちに幼少の頃から自然・文化・芸術に日常的に触れさせることの重要性を忘れてはなりません。支援を表面的な生活に限定してしまいますと、「家庭優先の原則」の今の国の政策の中では、貧困の連鎖を生み出してしまうケースが多く出てしまうということです。貧困には、物質的貧困と文化的貧困とがあります。この文化的貧困の多くは単なる生活支援だけでは、この文化的貧困は解消できないのです。放っておけば文化的な貧困は連鎖します。

石井記念友愛社は、保育園においても児童養護施設においても、自然・文化・芸術との触れ合いを通し、感性をみがく場で常にありたいと願います。感性をみがくことが、石井十次が岡山からこの宮崎へ移住した重要な目的でもあったからです。

③友愛通信8月号にも書かせていただきました。石井記念友愛社の到達目標「友愛の地域社会づくり」を、「友愛・共生と循環の地域社会づくり」と、膨らませたいということ。

これは、より複雑、多様化した自然、社会状況に対応したいという思いからであります。特に「循環」にこれからこだわらなければならないのではないか。先日また熊本地震がありました。多くの方々が被災され避難生活をされています。御見舞申し上げます。いつも考えるのは、災害時に地域の方々の避難所になるべき福祉施設が全く機能を喪失してしまっている例が多いということ。古い施設で倒壊してしまったのなら仕方ないのですが、新しい施設でも地域の方々に手を差し伸べることができないのです。耐震性は十分に備えているのに、電気・ガス・下水道すべて現代のインフラに頼りきってしまっているのです。古井戸が一つでもあれば、多くの人たちが助けられるのだと思います。

今までは、すべてのインフラが、平和と繁栄が永久に続くことを前提に組み立てられて来ました。その前提が崩れつつあります。自然災害が頻発するようになりましたし、世界の情勢を見ても、平和や繁栄も保障されるものではなくなって来ました。

一言でいうならば、縄文時代の感性を取りもどすべきだということになります。石井十次が岡山からこの地に移住し、子供たちに農家として独立してもらい、新しく出た孤児はその農家で里子として養育するという構想を描きました。これは、この地球上の人間としての立派な循環の思想とも言えます。私たちは、まだ幸いにその原点から遠く離れてはいません。石井記念友愛社では、今でも米を作り野菜を作っています。その作業に関わる仕事を、自立と共生のための教育として位置づけ、子供たちには“労作”として認識させています。

今後、より明確にその思想を残していくため「循環」という言葉を使いたいと思います。以上、81年目の夏に皆様の前で確認し、第一歩を進めたいと思います。